
気持ちを確かめて。

緋澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気持ちを確かめて。

【Nコード】

N7471V

【作者名】

緋澄

【あらすじ】

突然マネージャーから、無人島へ合宿しろと言われて!?

く突然の出来事く

目の前に広がるスカイブルーの海が、淡い光を弾かせて水面をキラキラと輝かせていた。

海の近くには、真つ白な砂が敷き詰められている。

そして、その周りには緑の草やヤシの木などが。

そんなところに、俺、二宮和也と嵐のみんながいます。

何でかと言うと、これには深い深 - い訳が。

時は遡り、昨日のことだ。

昨日。

「明日、あなたは無人島へ合宿に行ってもらいます」

「……………へ?」「……………」

俺達5人が声を合わせたのも無理はない。

いきなり、マネージャーがこんなことを言ってきたのだから。

何で、いきなり合宿に?

「あの、何で合宿を?」

みんなが一番気になることを、嵐1のしっかり者 翔ちゃんが聞いた。

それに対して、マネージャーは口角を吊り上げ

「…分からないのですか?」

と、声を震わせながら拳を作った。

「……………?」「……………」

俺達は顔を合わせて、首を傾げた。

…何か、したっけ?

悪いことなんて、何も ……。

「仕事がないとき、ダラけていましたね?」

…へ?

く団結して

…という訳で。

俺達は、無人島へ来たんです。

ほんとはね、来たくなかったですよ？

でも、翔ちゃんがあんなにキラキラした目で、楽しみだって言うように俺達を見たもんだから…。

断れなかつたんですよ…。

耐えられるかな、無人島生活。

と、俺が一人で考えていると …。

「みんな…！食料、探しにいこ…ぜつ…！！」

真つ先に提案したのは、この合宿に一番に賛成をしていた翔ちゃんだった。

…え…。

めんどいよ…てか、俺、食べなくても生きていけます。

と、俺がそう思っていると …。

「いいねえっ…！！俺、焚き火するための木を探してくるよ…！！」

いきおいよく手を挙げて宣言したのは、相葉さんだ。

そして、そのまま走っていった。

「行ってらっしゃいっ…！！」

翔ちゃんは笑顔で手を振って、相葉さんを見送った。

…相葉さんに適任ですね、焚き木集め。

俺は声に出さずに、心の中で呟いた。

「じゃ、みんなはどうする？役割分担しよっ」

翔ちゃんはノリノリだ。

…仕方ない。

「俺、木の実集めてきます」

そう言っつて、俺は立ち上がった。

俺のこの一言で、みんなも役割を決め始めた。

「じゃ、俺はモリで魚突いてくる」

そう言ったのは潤くんだ。

「俺も、松潤と一緒に魚行ってくる。釣りだね」

これはリーダー。

次々と役割が決まっていくな、まだ肝心の翔ちゃんは役割が決まっておらず。

俺はチラリと翔ちゃんを見て、聞いてみた。

「で、翔ちゃんは何すんの？」

「俺は……。じゃ、二ノと木の実採るよ」

翔ちゃんはそう言って笑い、拳を作った

「よし、決まりだ!!みんな、張り切っていこう!!くれぐれも怪

我はするなよっ!!」

「お!!!!」

「お……」

2人の元気な声と、1人のやる気のない声が、広い無人島に響き渡った。

ガサツ……

「うん、いい感じ」

……はい、来ました。

無人島にある、木の実ワールドへ。

この島、木の実がなってる木多いね。

てか、木の実カラフルすぎ……。

青とかピンクとか紫とか……。

害とかありそ……。

そんなカラフルな木の実を、翔ちゃんは何の躊躇いもなく採った。

「これ、食べれるよね？色はイマイチだけど…」

翔ちゃんは一人でぶつぶつと言っている。

一方の俺は、もくもくと無言で木の実を採っていた。

いつまで翔ちゃん、独り言言っただろ。

そんなことを思っていると…。

しーん……

…え！？

いきなりの沈黙！？

今まで一人で話してたのに！！

…あ、もしかして飽きたのか。

俺は納得して、木の実採りを再開した。

数時間後。

けっこう採ったなあ…。

日も暮れてきたし、そろそろみんなのところに帰ろう。

「翔ちゃん、そろそろ戻る」

俺は、木の実を詰めた籠を持って振り返った。

「…ん？あ、もうそんな時間？」

翔ちゃんはビックリしたように、目をパチパチとさせた。

…どんだけ熱中してたんだ。

翔ちゃんすげーな……。

「じゃ、行こっか」

翔ちゃんはよいしょ、と籠を背負い、俺の分の籠も抱えた。

「あ、翔ちゃ」

「ほら、早く。足場、気を付けてね」

…優しいな。

翔ちゃんはいつつもヘタレだけど、ほんとに頼りがいがあるってお母さんみたいな人。

これだから、ファンが多いんだよ…。

俺がそう考えると、少し胸がチクリと痛んだ。

その痛みが何だったのかを知るのは、まだ先の話。

く気持ちの変化く

あれから俺達は、木の実ワールドからみんなの元へ戻った。みんなの収穫した物は、俺と潤くん、リーダーが調理することになった。

まあ、リーダーは魚捌くためにいるんだけど。

…とは言わずに、俺は食材を手にとってナイフを滑らせた。

「やっぱり二ノ、包丁捌きいいね。」

潤くんは俺が食材を捌くのを見て、羨ましそうに言った。

「そ…かな…。フツ…だよ。」

俺は視線を少し、捌いている手に向け、すぐに潤くんの方へと視線を戻した。

「ほんとだあつ！二ノ、上手い！」

相葉さんはぴよこつと俺の横から顔を出した。

「…相葉さ、」

「相葉ちゃん、火起こすの手伝って。」

翔ちゃんは、大きい声で相葉さんと呼んだ。

相葉さんは嫌々ながらも、翔ちゃんに近づき火起こしを始めた。

…俺は調理しなきゃ。

タンタンタン…ッ

「お、いい感じに捌けてるね。」

リーダーはうんうんと頷き、俺を見た。

「ありがとうございます。リーダーにお褒めいただけるなんて、光栄です。」

なんて、冗談を言ってみた。

リーダーは苦笑いして

「なんだ、そりゃ。」

と言った。

2人で冗談を言い合いながら、笑っていると…。

「魚焼けたよ。」

と、潤くんの声が聞こえた。

魚、もう焼けたのか。

俺も早く捌き終わろう。

数十分後。

「できた。」

俺は、捌いた魚をあらかじめ用意していた皿に盛り付け、リーダーと潤くんを呼んだ。

「終わった？じゃ、2人のところに戻る。」

俺達3人は、火を起こしている2人の元へ急いだ。

「わーあつ！！旨そうな魚ッ！！」

2人は目を輝かせて、並べられている魚料理を見た。

「たくさんあるから、どんどん食べてね」

潤くんは二人に取り皿と箸を渡した。

「木の実は、デザートにしました」

リーダーはにこにこ笑って、デザートに乗った皿をテーブルに置いた。

「……………」

俺は、チラリと翔ちゃんと相葉さんを見た。

……………何だろ。

おかしいな。

俺の異変に気付いたのか、潤くんは心配そうに俺を見た。

「二ノ、どうした？」

…はっ。

「な、何でもないよっ」

俺は平静を装って笑った。

だって、こうでもしなきゃ気持ちが悪くしてしまうから…。

「そ、か。体調悪くなったら言ってるね？」

「うん。ありがとう」

そう言ったとき、俺は黙り込んでしまった。

そんな俺を、ある人が心配そうに見つめていたなんて、知るよしもなかった……。

く戻れない二人く

「ご飯食べ終わったし、どうする？」

潤くんは、皿を片付けながら俺達に聞いた。

そういえば、いつまで合宿をするのだろう？

早く終わって欲しい。

俺がそう思っていると。

ブルル…ッ

「あ、電話だ。…マネージャーから…？」

無人島なのに圏外じゃないんだ。

と、不思議に思いながらみんなと離れた場所で電話に出た。

「はい」

『もしもし？』

「何ですか？」

『あ、昨日言いそびれたことが ありまして』

「言いそびれた、こと？」

『はい。合宿の日数のことです。言ってませんでしたよね』

「うん。いつまで？」

『明後日までです。2泊3日で すね』

「意外と短いんだ」

『まあ、はい。では、それだけ ですので。残り2日を大切に 過

ごしてく下さい』

「…はい」

『2日後に向かいにいきます。 では』

プツッ…ツーツー

「……」
パチンツ

俺はスマホを閉じ、苦笑してみんなのそこへ戻った。

「どこいったの…、二ノ」

相葉さんは、俺の元へ駆けつけた。

「あ、マネージャーから電話来たから向こう行ってた」

「マネージャーから？何て言ってたの？」

「それは…」

ふと視線をずらすと、スマホをいじっている翔ちゃんが目に入った。

「…翔ちゃん？」

「あ、二ノ」

俺が不思議そうにスマホを見ていたからか、翔ちゃんは説明を始めた。

「…これ？マネージャーからメールきてさ。返信してる」と」

「何か、言われたの？」

と聞くと、翔ちゃんはぴくつと反応したが、

「何でもないよ。ただ、みんな元気かって聞かれただけ」

と、返すだけだった。

それなら、俺と電話してたときに聞けばよかったのに。

何で、わざわざ翔ちゃんにメールなんかしたんだろう…と思ったが、あまり気にはしていないと思い、

「そっか。あ、そうだ。合宿、2泊3日だって」

と、返事をした。

「あ…、マネージャーから聞いた。明後日までだよね」

「ん。早く終わって欲しい…」

俺が本音を言うと、翔ちゃんは

「案外、楽しいよ。みんなとわいわい合宿なんて、若いときしかなかったから」

翔ちゃんはにこつと笑って、スマホをポケットにしまった。

…そう言われてみれば、そうだった。

昔は、よく合宿してた。

でも、今はコンサートとかレコーディングとかで忙しくて、それどころじゃなかった。

…だから、マネージャーは合宿を提案してくれたのかな？

初心に戻って。

息抜きの時間も含めて。

「…そうだね。まあ、相葉さんがいればいつでもわいわいだけどね
俺は、苦笑いして翔ちゃんを見た。

翔ちゃんは、悲しそうな顔をして少し笑いながら、俺から視線をずらした。

「…二ノは、さ。相葉ちゃんのこと」

「え…？」

「おーい、二人ともっ！！肝試ししよー！！」
声がする方へ振り返ると。

「相葉さん…」

予想通り、相葉さんだった。

その後ろには、潤くんとリーダーもいた。

「面白いスポット見つけたんだッ！！行こっ！！！！」

相葉さんは、ニヤリと笑いながら俺の手を引いた。

「ちょ、相葉さ…」

ぐいぐいと引かれる手。

…力、強っ！！！！！！

「あの、どこに…っ」

「相葉ちゃんっ！！！！！！」

え？

ヒョイッ

「二ノ、借りてくからっ」

「え？え？」

俺は翔ちゃんに抱かれながら、暗い道に連れていかれた。

「あのっ！？何で……」

「……さっきの話の続き」

翔ちゃんは、少し怒ったように呟いた。

さっきの……？

「二ノは、さ。相葉ちゃんのこと」

俺は、さっき翔ちゃんに言われたことを思い出した。

さっきの話って、あれ……？

「ねえ、さっきのってどういう意味……」

「まだ言わない。もう少し待って」

翔ちゃんはそう言ったつきり、黙り込んでしまった。

……俺、何かした？

急に不安になって、翔ちゃんの服の裾をぎゅっ…と握った。
こうすると、安心できるかもしれないと思ったから…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7471v/>

気持ちを確かめて。

2011年10月9日13時41分発行